

【滋賀県人権擁護委員連合会会長賞】（中央大会 法務省人権擁護局長賞）

あなたにとっての普通とは

甲賀市立甲南中学校 2年 粕淵 陽翔

「支援学級」これは、存在してはいけないものなのか。

「別室に行つとる奴がいるけど、あんなんあかんねん。あんなもんがあるからあかんねん。あんなん逃げとるだけやねん。」

「僕のことやん」と思うと同時に、今まで僕なりに頑張ってきたこと全てと、何より僕という存在を全否定された気持ちになった。

僕は、良くも悪くも感受性が強い。他の人が怒られているのに、自分が怒られているように感じたり、友達や先輩が泣いていると、僕まで泣けてくる。喧騒の中ではすごく疲れる。周りで起こること全てを受け止めていたら、キリがないし身がもたない。頭では良く分かっている。

支援学級に偏見を持っている人は多くいると思う。「特別支援学級」この名称が表しているように「特別」であって「普通」ではないからだ。「普通」じゃないと、弾かれる。じゃ聞きたい。「あなたの『普通』は何？」

昔、同級生に聞かれたことがある。「何でここに（支援学級）いるん？」「アホやから」別の同級生が答えて走り去った。家に帰って聞いてみた。母は「ごめんな」と僕を抱きしめたまま説明してくれた。学校は大人になって社会に出た時、困らないように練習するところ。嫌なことしかなくても、乗り越えていく気持ちと、自分自身で解決する力をつけるところ。でも頑張り続けると心が壊れてしまうから、学校にいる間も家みたいに、安心して過ごせる場所が必要かなと思って、支援学級を選んだと。そして、僕が必要ないと思えば、支援学級には行かなくてもいいし、それを決めるのは僕だと。僕は小さいながらも、母の言いたいことが理解できた。頭では。でも嫌なことばかりでもなかった。そこは、騒がしい交流（普通教室）とは違って、落ち着いて物事を考えることができる僕の大切な場所だった。そして、何より大きかったのは、信頼できる先生達との出会いだった。時には先生が相談を持ちかけてくれたり、先生と生徒という垣根を越えて、一人の人間として対等に接してもらえているように思えて、嬉しかった。今の僕があるのは、そんな先生達の支えがあったからだと思う。

不安でたまらなかった中学校生活が始まった。もちろん、ここでも問題が山積みで、行きたくないと思ったこともあるし、身体がいうことをきいてくれなくて、行けない日もあった。自分の気持ちに折り合いをつけ、しぶしぶ靴を履く。行ってみると意外と楽しい。初めは何を話せばいいのか分からなかったけど、いつしか兄弟のように接してくれる先輩。いつも側にいてくれる友達。そして手を差し延べ、支えてくれる先生。自分一人では、乗り越えることも、解決することもできなかったけど、僕なりに逃げずに頑張ってきた。

何も知らないのに、深く知ろうともせず、誰かのものさしで人を判断してはいけないし、されたくもない。いざ、あなたが、あなたの思う普通という安全圏から弾かれた時、あなたはどう思うのか。想像してみしてほしい。世の中から、差別や偏見が根絶することはないだろう。でも努力はできる。「口には出さない」という手段で。

ある人が言った。「言論の自由やん。」僕は何か違うと思った。憲法21条に「表現の自由」とあった。解釈は色々あったが、人を傷つけていいとは、どこにも書いていない。法律に守られているかのように勘違いし、自由に放った言葉で、傷つき悲しむ人がいること、そして生きることを諦める人がいることを忘れないでほしい。

心ない言葉が、僕の心をズタズタに踏みにじった。忘れられるものなら一刻も早く忘れ去りたい。記憶の片隅にさえ残らないほどに。自分のされたことを伝えるのは怖い。なぜなら、新たな偏見と報復を生むからだ。今も一人で抱えて苦しんでいる人がいる。僕には力がない。でも、僕は声を上げることができる。「もう終わりにしよう。」

僕の成長を願って見守り、一緒に考え、一步踏み出す勇気を与えてくれた先生達が、心の糧となっている。大切な人と出会わせてくれた支援学級に「ありがとう」と言って卒業したい。